AVが戦場を支配し始めている。昼夜を問わず、常に上空を徘徊し、獲物を探している攻撃型UAVへの適切な防護なくして、戦車を含む装甲戦闘車両の運用は困難な状況となってきた。UAVへの対応は、戦車だけではなく既存の陸上装備全般が突きつけられている最優先の課題であり、車両自体の防護のみならず、部隊全体を防護するC-UAVシステムを構築することが早急に求められている。

（完）

頼清徳台湾新総統 就任式に参列して

柴田　幹雄　陸自75

日本安全保障戦略研究所（SSRI）と台湾戦略研究学会との日台戦略対話に参加した。日程をうまく組んでくれて、5月20日の頼清徳（らいせいとく）台湾新総統の就任式典と前夜のレセプションに招待されるという得難い機会もいただいた。

前夜のレセプションは外務大臣主催で、迎賓館のような建物も庭も、供された何種類もの料理もエンタテイメントも、さすがに国威をかけて準備されたものなのだろうと思える素晴らしさだった。日本の議員団の顔も見えた。台湾と外交関係のある太平洋島嶼国や中南米らしい顔やEUのピンバッジを付けたグループなど欧米系の顔も多く、多くの国から関係者が招待されているようだ。少し驚かされたのは会場へ頼清徳新総統と蕭美琴（しょうびきん）新副総統が現れたことだ。短いスピーチをしたのだが、間近に見る新総統は大変若々しく、それでいて頼もしく感じさせる雰囲気を持っていた。

中央：頼清徳総統、左：蕭美琴副総統

翌20日は就任式典が総統府前の広場で実施された。事前に渡された大きなIDカードを首にかけて、荷物の持ち込み制限もあり、かなり厳重な警備だった。会場は配られた白い帽子をかぶった人で埋め尽くされている。私たちは指定された席についた。日本人用に配置された一角でステージもよく見えた。式典の前半は儀仗隊のドリルに始まり、民族衣装を着たグループのダンスや人気歌手の歌、パレードといったお祭りのような雰囲気で、空軍航空機によるスモークを引いた編隊飛行で盛り上げる。

いよいよ新総統の就任演説が始まった。会場で配られた就任演説全文の日本語バージョンを読みながら、演説を聞いていると時々大きな拍手と声援が沸き上がる。もちろんどの部分が聴衆に受けているか、わからないものの、かなりの盛り上がりである。

日本語の演説文を読んで、驚いた。それは国とか国民という単語を頻繁に使っているのだ。演説文冒頭すぐに「（台湾は）1996年の今日、台湾で初めて民選による総統（李登輝）が宣誓就任し、国際社会に中華民国台湾は主権独立国家であり、主権は民にあるというメッセージを伝えました」と述べている。「独立」という単語は全文中ここだけであるけれど、1996年からずっと独立

国家であると述べたのだ。この後、「国家」「国民」という用語を頻繁に繰り返している。

「中国の軍事行動とグレーゾーンでの脅威は世界の平和と安定に対する最大の戦略的課題とみなされています。台湾は『第1列島線』の戦略的位置にあり、世界の地政学の発展に影響を与えています」と述べ、従来大陸との関係に終始しがちな対外関係を世界的規模の視点で述べている。台湾はバシー海峡を挟むフィリピンと関係を強化し、もちろん日本との関係強化にも努力して、日米が重視するインド太平洋構想の中での台湾の位置づけに着目しているのだ。

さらに驚いたのは、「国民同胞の皆さん、私たちは平和を追求するという理想を持っていますが、幻想を持つことはできません。中国はまだ台湾に対する武力侵攻の可能性を断念していません。中国の提案を全面的に受け入れ主権を放棄したとしても、中国の台湾併合の企みは消えることはないことを、国民の皆さんは理解すべきです」と述べている。これに続いて、中国の脅威や浸透に対し国防を強化して抑止力を発揮し戦争を回避し、実力によって平和を達成せねばならないとも述べている。この前に対等の原則の下で対話と交流を進め、協力し合うことを望むとは言うものの、そのあとで力に対しては力で対抗すると決意を示している。これは、ほぼ中国が力で来るなら台湾も力をもって対抗するぞ、と宣言しているように思える。

さらには、憲法により中華民国の国籍を有する者は中華民国の国民であると定めていると述べ、続けて「このことからも分かるように、中華民国と中華人民共和国は互いに隷属していないのです」と記述された文を読み、驚いた。これは明らかに一つの中国を否定し、中華人民共和国と対等の中華民国、すなわち言葉こそ使っていないが「独立していること」を明言したに等しい。

全国民はその背景に関係なく「台湾にアイデンティティーを持つ限り、すべての人々はこの国の主人です。中華民国、中華民国台湾あるいは台湾のいずれであっても、これらは私たちの（中略）国を呼ぶ名前であり、それらはすべて同じ響きを持っています」と一致団結を訴える。

もともと台湾に住んでいた原住民（先住民という語は台湾ではすでに絶滅した民族という意味で使わない）や古くから大陸から移民してきた住民は、「台湾」を使うだろう。蒋介石率いる国民党軍民が来てから、台湾が「中華民国」になった。国民党は正式名中国国民党であり、台湾国民党ではない。あくまで中国共産党に負けて逃げてきた中国国民党で、本来は中国に反攻し大陸を支配するのが本願である。したがって、一つの中国という概念は習近平の言う言葉と同じであり、台湾が中国の一部であるのと同様、大陸は台湾の一部である。さすがに今大陸反攻は現実的ではないが大陸への執着は残り、中華人民共和国への親近感に変質した部分もあるように思える。それで中華民国台湾という呼称も両者の融和のためのものだろうか。

賴清德新総統の就任演説全文を何度も読んで、これは大変な演説だと思ったのだが、翌日の台湾学会との交流などでは「新総統の民主台湾に対する自信に感銘しました」という程度の感想を述べた。ただ先方は意外にもクールで、あまり就任演説には深くかかわってこなかった。我々のグループの一員が「実質上独立」という表現をしたら、あたふたしてその言葉はちょっととやんわり注意された。

私たちは就任式の翌々日、22日に帰国した。就任演説に対する日本のマスコミ報道では、賴清德新総統は「現状維持」を何度も強調したという表現ばかりであった。確かに演説では「へつらわず、高ぶらず、現状維持に取り組んでまいります」と、現状維持という単語を使っているが、それはかつて主権独立国家だというメッセージを伝えて以来の「現状」を維持するとも読める。中国に対する力による現状変更への警告とも読める。全体的に日本のマスコミが言う「現状維持」とは読めなかった。

当然、中国は直ちに強く反発し過激な言葉で攻撃した。しかし22日台北の市街、露天市場などは、いつもどおりで特段変わった様子もなかった。ただ賴清德新総統は海兵隊部隊を視察し即応体制を点検した、との報道をあとから知った。おかしなことに日本の報道は、引き続き中国の恫喝に対し、新総統は現状維持を強調しているので、過剰反応は慎むべきだという論調である。台湾は平然

としているのに日本が代わりに中国に許しを請うてなだめているような形で、全く笑ってしまう。台湾がここまで言った以上中国も黙っていないだろう、日本も備えをしっかりしなければという論調になってもいいと思うのだが、妙な話である。

中国生まれで日本に帰化し中国問題を鋭く解説している石平氏は、ユーチューブ（石平の週間ニュース解説、5月25日）で興味深い話をしている。台湾総統はタブーを破って堂々と反中独立を宣言した、というのだ。これに対し習近平は怒り狂ったが、軍事恫喝も空振りした。蔡英文は就任演説でも「中国」という固有名詞を完全に避けていた。中国を「対岸」とか「北京当局」と呼んでいたと指摘し、今回「中国」を使っているが、これは外国が中国を呼ぶときに使う。つまり台湾・中華民国は中国とは別個の国であって、中国は外国であるという意思表示であるという。なるほどと納得した。演説で「台湾併合の企みがやむことはない」と明確な警告をしているが、これは中国は敵国だと定義し、反中姿勢を隠さないのだと解説している。中国の反応や演説に対する人民日報の全面論説なども紹介している。いかに中国が就任演説に不満を持っているかがわかる。

中国はここまで言われたら、武力行使するレッドラインを超えたと言えば言える。日本のマスコミはことさらに現状維持を強調して中国の怒りの鎮静化を図ろうとしているように見えるが、いかがなものか。

台湾有事は日本有事と掛け声だけはいいが、台湾有事に日本は台湾のために何ができるか台湾有志と話をすると、台湾に貢献できることなどほとんどない。台湾は、国民保護のシェルターから上陸適地の障害準備までもしており、徴兵制度、予備役制度も完備している。

翻って日本は、台湾有事への備えなど始まったばかりである。台湾有事が日本有事であることは間違いない。そうであれば、逆に日本防衛が台湾防衛にもつながるのであろう。台湾が覚悟を決めて独自の道を進むと宣言した以上、中国がどう動くか習近平の肚一つである。日本は、中国をなだめ何も起こらないことを願うのではなく、日本の対中防衛作戦準備を怠りなく進捗させなくてはならない。